



# 近世の御振舞いの構造と「御鷹之鳥」観念

大友 一雄

はじめに

一 「御鷹之鶴」の江戸拝領と御振舞い  
二 「御鷹之鶴」の宿継拝領と御振舞い

三 近世における「御鷹之鶴」観念と將軍權威  
おわりに

はじめに

近年、近世の朝幕・朝廷・天皇に関する研究は、制度史的にも社会史的にも大きな前進を見せている。なかでも、徳川幕府あるいは様々な社会集団と朝廷の伝統的宗教的權威に関わる問題は、中世からの連続や近代を展望する際にも重要となる基本的テーマであることは間違いない。しかし、徳川幕府や諸集団が、決して朝廷の持つ伝統的な權威によつてのみ自己を公のものとして正統化し得るものでなかったこともまた事実である。

徳川の「平和」の成立にともない武威による支配が内在化され、儀式典礼が支配のための装置として重要な意味を

有することになり、合理性が追究されるべき政治すらも儀式典礼と無関係では成り立たぬものとなる。かかる状況のもとでは様々な権威をよりどころに、自己を正当化するための由緒・旧記の創造も広範にみられることになった。朝廷も決して近世社会のなかで異質な存在であつたわけではなく、朝廷の近世化が進み幕府・藩、そして様々な社会集団との間にも一定のバランスを得ていたといえるが、近世社会に認められた様々な集団の権威が、すべてそこに収斂するような構造ではなかつたと考える。集団と集団、あるいは人と人がいかなる社会的な関係を取り結ぶのか、その多様なあり方を、その展開とともに示していくことが社会構造や国家と民衆の関係を豊かに描くことになることは間違ひなからう。

ところで、旧稿<sup>(1)</sup>で筆者は鷹をめぐる多様な集団と集団との関係を、贈答行為を通じて追究することの有効性を指摘した。また、將軍からの「御鷹之鳥」の下賜状況を、時代的な相違や下賜基準などを踏まえながら解明し、將軍からの「御鷹之鳥」の下賜が諸大名の家格的な編成と密接に関係し、統治のための装置となつていたことを明らかにした。さらに、こうした分析を念頭に従来<sup>(2)</sup>の鷹に関する研究が、もっぱら鷹場研究としてなされ、やや強引な地域支配機構論に陥っていることも指摘しておいた。

しかし、將軍より下賜を受けた「御鷹之鳥」を藩がどのように処理するのか、この点については、充分な検討を行うことができなかった。よつて本稿では、主に秋田藩を事例として「御鷹之鳥」を下賜された藩がいかなる対応を見せるのか、この点を明らかにし、その意義を考えていきたい。なお、この分析は、下賜された「御鷹之鳥」をめぐる御振舞いの場に関する研究ということもできる。様々な儀礼的な行為には、ほぼ必ず贈与行為が伴うことを先に指摘したが、儀礼的な場面では、共同飲食を伴うことも少なくない。儀礼を構成する重要な要素であり、贈与儀礼から飲食儀礼へと連鎖的な展開を見せる場合もある。検討に先立ちもう少しこの問題に触れるならば、共同飲食＝飲食儀礼

に關しては、『今昔物語』の「芋粥」の説話から庄園制下の贈与と客人歓待について論及した保立道久氏の研究<sup>(3)</sup>や、古代中世における共食・饗宴の場の身分制的な意義などについて論及した原田信男氏の研究<sup>(4)</sup>をはじめかなり多くの研究がある。しかし、その大半は古代中世に関するものであり、近世史研究では、いまだ充分な検討が加えられていない。幕府や藩など武家社会に見られる共食、村や町といった単位でのもの、家を中心とする同族類縁の共食、あるいは商人や職人組織における場合、こうした様々な集団・組織における共食のあり方をより豊かに示して行くことが必要といえる。もちろん、場の検出のみならず、その集団にとつての共食の意義が問題になる。

本稿での「御鷹之鳥」の御振舞いの場に関する検討は、右のような研究状況にも発しているわけであり、ことに武家社会にある様々な共同飲食のなかでも將軍、藩主によつて主催される共食に注目したい。もちろん、保立氏が示したように共同飲食の場は「互酬的な贈与の食物連鎖」によつて広がりを見せていくことも充分考えられるわけであり、「御鷹之鳥」の御振舞いを一応、武家社会を中心に検討していくが、その広がりにも注意したい。<sup>(5)</sup>

## 一 「御鷹之鶴」の江戸拝領と御振舞い

ここでは、將軍からの「御鷹之鳥」の拝領にともなう藩の対応を秋田藩を例に明らかにしたい。なお、藩の対応は拝領した鳥（鶴・雁・雲雀など）の違いによつて異なることも考えられるが、取り敢えず、ここでは「御鷹之鳥」のなかでは最も格の高い「御鷹之鶴」を対象としたい。<sup>(6)</sup>

また、以上の検討のために、『国典類抄』をもとにして、「御鷹之鶴」の拝領状況を一覧する表（第一表）を作成した。<sup>(7)</sup>「国典類抄」は文化期に編纂されたものであり、「御鷹之鶴」の拝領に関する、すべての記録を網羅しているかどうか、

第1表 秋田藩「御鷹之鶴」拝領一覽

年 代	江戸拝領	宿繼拝領	下賜将軍	拝領者名
元和3年(1617)	○		秀忠	初代家宣
元和5年(1619)	○		秀忠	同
元和7年(1621)	○		秀忠	同
元和8年(1622)	○		秀忠	同
寛永1年(1624)	○	△	家光 秀忠	同
寛永2年(1625)	△		秀忠	同
寛永3年(1626)		△	秀忠	同
寛永5年(1628)	△	△	秀忠	同
寛永7年(1630)	△		秀忠	同
寛永9年(1632)	○		家光	同
正保1年(1644)	○		家光	2代義隆
承応2年(1653)	○		家綱	同
万治3年(1660)	○		家綱	同
寛文2年(1662)	○		家綱	同
寛文4年(1664)	○		家綱	同
寛文6年(1666)	○		家綱	同
寛文8年(1668)	○		家綱	同
寛文9年(1669)		○	家綱	同
寛文10年(1670)	○○	○	家綱	同
寛文11年(1671)		○	家綱	同
延宝2年(1674)	○		家綱	3代義処
延宝4年(1676)	○		家綱	同
延宝6年(1678)	○		家綱	同
天和2年(1682)	○		綱吉	同
貞享1年(1684)	○		綱吉	同
貞享3年(1686)	○		綱吉	同
元禄1年(1688)	○		綱吉	同
元禄3年(1690)	○		綱吉	同
元禄5年(1692)	○		綱吉	同
享保12年(1727)		○	吉宗	5代義峯
享保14年(1729)		○	吉宗	同
享保17年(1732)		○	吉宗	同
享保18年(1733)		○	吉宗	同
元文5年(1740)		○	吉宗	同
寛保3年(1743)		○	吉宗	同
宝暦6年(1756)		○	家重	7代義明
明和2年(1765)		○	家治	8代義敦
明和8年(1771)		○	家治	同
安永6年(1777)		○	家治	同

註.△印は、大御所秀忠からの拝領を示す。

本来充分な確認が必要であるが、幕府の下賜基準なども念頭にそのデータを確認するならば、充分に検討に耐えうるデータといえそうである。

作表に際して藩主が在府中に鶴を受ける「江戸拝領」と、在国中に受ける「宿繼拝領」に二分して示したが、この措置は「国典類抄」の編集方針に従ったものでもある。「徳川実紀」では、宿繼拝領については「在封により鶴を賜

ふ」「鶴を賜せらる」などと記し、江戸拝領については「御使いをして鶴を下さる」などと表現する。この違いは単なる拝領場所の違いに止まらず、その性格的な違いをも意味するものと考えられる。以下の検討でもこの二形態に注目して論を進めてみたい。

なお、表から全体的な特徴を指摘するならば、生類憐み政策との関係で下賜行為が中断する元禄・正徳期を挟んで大きく前後に二分して捉えることができる。前期の「御鷹之鶴」の下賜は、国元で拝領することが数度あるものの、その大半は江戸拝領である。これに対して後期は宿継拝領のみであり、江戸拝領は全く見られない。前期と後期とは「御鷹之鶴」拝領の意義が異なると考えることもできよう。

### (一) 元和期の「御鷹之鶴」の拝領

前掲第一表によれば秋田藩では、元和三年（一六二七）から、生類憐み政策によって「御鷹之鳥」の下賜が停止にいたる元禄五年（一六九二）まで、概ね隔年ごとに鶴を在府中に拝領しており（ただし、寛永十年頃より万治期までの二五か年間ほどは、八一〇年置きとなっている。これは史料の残存に係っていると見られ、拝領基準によるものではない）、その拝領回数は二七回に及ぶ（このうち三回は大師所秀忠による）。具体的な例を元和八年正月二十二日、初代藩主義宣が將軍秀忠より「御鷹之鶴」を拝領したときに求め、その様子を確認してみたい。<sup>(8)</sup>

元和八年の拝領がどのように決定したものか明らかでないが、拝領を受けると初代藩主義宣は早速御礼のために登城する。また、本多上野介正純・酒井雅楽頭忠世・土井大炊頭利勝といった年寄衆へも早速御礼の使者を立て、さらに日をおかず「御鷹之鶴」の振舞いの席への招待を申し出ている。この鶴の振舞いは、前述の通りそれをながめ楽しむといった性格のものではなく、飲食儀礼であった。

「御鷹之鶴」の振舞いは、同月二十九日に設定され、振舞いのために能役者喜多七大夫・進藤久右衛門・同権右衛門・植田又四郎などにも声が掛けられた。なお、このうち喜多七大夫は既に大名黒田家に約束があったために出演を断っている。また、振舞いに欠かせぬ「御包丁人」市介にも手助けを求めている。御膳の用意などで調理場に多数の人員を必要としたが、右の「御包丁人」の性格は、出典である『梅津政景日記』正月二十四日の条に、前述の幕府能役者招請の件に続けて記されることから、幕府の包丁人と考えられる。また、御包丁人市介に期待された点は、単なる御膳の準備ではなく、「御鷹之鶴」の振舞いに欠かせぬ「鶴包丁」であつたと見られる。鶴を食するには儀礼的な調理作法「鶴包丁」が、振舞いの場への参集者を前に実施されたことが近世には汎く確認できる。また、調理を神聖な儀式として捉えることが汎く見られ、作法書などのなかにもその手続や方法が記されてくる。そもそも鶴包丁は神聖視される「御鷹之鶴」を穢さぬための料理作法として成立したものであろうが、幕府が進献した鶴を正月に宮中で天皇が公家達へ振舞う場において確立し、この作法が諸藩での鶴の振舞いにも欠かせぬものとして次第に伝播したとみられる。しかし、右の元和段階では幕府の包丁人と見られる者が招かれており、鶴包丁という包丁儀礼の作法そのものは、いまだ藩方へ充分に伝播せず、幕府の包丁人の手助けが必要な状態にあつたといえよう。なお、鶴包丁は次第に国元でも行われることになっていく。

さて、一定の作法に乗っ取り、衆人のもとで披かれた鶴は、吸物として振舞われる。ただし、御膳を賑わす様々な料理の一つとして添えられるのではなく、他の料理とは別個に扱われ、まず、藩主の指揮のもとに鶴の吸物を供する場が設けられた。一般の料理の饗宴の席は、これが済んでからであり、元和八年の時の献立や使われる食器類を確認するならば、「木具御本膳・金之土器・壺・皿、二之膳・金之かい匏、金之小桶、三・金之地紙向請有、御肴色々、台之物（大きな台にのせた料理）三ツ、供饗式十、削花ふき花有折二台、後段二ひのうとん、其後御湯漬<sup>(10)</sup>」と記されて

おり、さまざまなものでなしの膳が用意されたことが知られる。しかも、金の食器類が利用されるなど食器類も豪華であり、料理の内容もそれに相応する贅を凝らしたものであつたことは間違いない。

ところで、この表立つた、いわゆる公式の「御振舞」の場への招待客は、右の三人の年寄衆をはじめ、永井右近大夫直勝、阿部備中守正次、酒井讃岐守忠勝、板倉周防守重宗（京都所司代）、松平右衛門大夫正綱（勘定頭）、伊丹喜之助康勝（勘定頭）、延寿院道三法印、鳥居士佐守成次（駿河大納言忠長家老）、朝倉筑後守宣正（駿河大納言忠長家老）、板倉内膳重昌（側近・近習）、久貝忠左衛門正俊（大坂町奉行）、米津勘兵衛田正（町奉行）、神谷縫殿などであつた。未確認のものもいるが、年寄衆はもちろんのこと、何れも將軍秀忠、あるいは次期將軍家光（家光の將軍職への就任は元和九年七月二十七日）の信任を得、幕閣において重きをなした出頭人などであり、まさに当代きつての重臣達が招かれたといえる。<sup>(11)</sup>

さて、この振舞いの席の性格が問題となるが、右の宴席は、未から始まり戌に至る。小鼓・大鼓・笛・地謡などの能役者も揃っている。ここには幕府の能役者達のみならず、藩抱えの能役者なども参加したことであろう。能は公式な宴席には欠かせぬものであり、能が確認できるところということはその席が改まった、公式の席であることを示すともいえる。また、こうした儀礼の場面が幕藩間の儀礼上の技法の伝播などに大きな役割を果たしたことも間違いない。

ところで、「御鷹之鶴」の振舞いの場合は、代替り最初の拝領であるとか、大名の格などと密接に関係し、その時々により規模を異にしたと考えられるが、元和期の佐竹氏の江戸御振舞いに注目すると、元和三年の場合には、「御鷹之鶴 御拝領、同九日ニ其鶴年寄衆御出頭江御振舞」とあり、また元和七年の史料にも「御拝領之鶴ニ而御年寄衆御振舞」といった記載が見られる。振舞いの主たる対象は年寄・出頭人といった重臣であり、元和八年の振舞いが特別であつたわけではない。当該期には盛大な振舞いの場が設定されていたのである。そして、より盛大な振舞いの場を



設定することが、「御鷹之鳥」を下した將軍の意を重んじることになったといえる。このように「御鷹之鳥」の宴席は、決して藩主の膳を賑すものでも、また、藩主が家中のものに振舞うものでもなかったのである。

ところで、こうした振舞いの場合は、後にみられる大名による老中招請の場と極めて近いものと考えられる。老中招請に関する具体的な研究は見られないが、近世後期には、一〇万石以上の大名が將軍宣下の際に、また、二〇万石以上の大名が將軍の転任、將軍世子の元服、官位の叙任の際に、また、一定の大名家では家督相続の機会に大規模な饗応の場を設けることが決められていた。<sup>(12)</sup>自家の家督相続に際してはともかく、徳川家の安定と繁栄を象徴するともいえる將軍宣下などの祝いを、老中や幕府の要職にあるものを招待して、何故行なうのだろうか。具体的な検討は後稿に期したいが、おそらくは、軍事的な緊張が続き、改易・減封が頻繁に見られた近世初頭に、自己保身の点から諸大名が徳川家の祝賀を盛大に祝ったことにはじまると考えられる。盛大であればあるほど將軍家へ恭順の意を示すことになる。また、徳川家もそれを歓迎したものであろう。しかし、幕藩関係が制度的にも確立するなかで、將軍家の祝事を祝う方法さえも統制され、身分・格式に応じたものとなり、また、いかなる祝事に振舞いを行なうかといったことも決定したのである。<sup>(13)</sup>

かかる段階は老中招請も幕府を中心とする礼的秩序を維持する装置の一つとして制度化された段階といえる。先の元和期の「御鷹之鶴」の振舞いの場合は、いまだそうした統制の対象となっておらず、年寄衆・出頭人を始めとする幕閣の人々を招待し、盛大に行なわれた。その場合は、まさに幕府向けの、恭順の意をアピールするための場であったといえよう。

## (二) 寛文六年の「御鷹之鶴」拝領と御振舞い

拝領や振舞いに、時代的な変化を見ることはできないのであろうか。次に寛文六年（一六六六）十月二十七日、江戸において第二代藩主佐竹義隆が將軍家綱から「御鷹之鶴」を拝領したケースについて確認しておきたい。なお、二代藩主義隆の在任期間は寛永十年（一六三三）二月二十六日から寛文十一年十二月五日までであり、前掲第一表に明らかのように寛文期になると、江戸詰めの方にはかならず「御鷹之鶴」を拝領した。寛文六年の拝領も恒例化したなかでの拝領であり、決して特殊な条件下での拝領ではない。

さて、寛文六年、鶴は渡部（辺）筑後守が將軍の上使として派遣され、ちょうど正午頃に拝領となる。藩主は早速將軍へ御礼のために登城し、老中・若年寄にも御礼の挨拶をした。こうした対応は元和八年（一六二二）の拝領と同様であるが、同年十二月十三日に催された振舞いの場のあり方は大きく異なっていた。招待客は、二十数名に及ぶが、そのうち上位の者を順に上げるならば、渡部筑後守正（旗本・御使番）、松平上野介近栄（出雲新田藩三万石藩主、佐竹二代藩主義隆の世子義処の正室は近栄の妹、近栄の父親は越前松平支流松江松平出羽守直政）、松平右近隆政（松平上野介近栄の弟、松平右近太夫ともある）、藤堂佐渡守高通（伊勢久居藩五万石藩主、佐竹右京太夫義処の娘が高通の養女となっている。ただし、養女となるは寛文六年以降か）、黒田専（千）之助長重（秋月五万石藩主、寛文五年父長興の遺跡を継ぐ。母は佐竹義隆の娘、姉が藤堂佐渡守高通の正室、当時七歳）、中根日向守正勝（旗本・大番頭）、中根大隅守正延（旗本・中根正勝長子、当時二六歳）、笥新兵衛正真（旗本・御先鉄炮頭）、岩城権之助景隆（亀田藩二万石岩城重隆嫡子、ただし、後に廢嫡。重隆の正室が佐竹家臣一門佐竹源六郎義直の娘。当時一二歳。なお、黒田甲斐守長興の正室は同家よりでる）などといった人物である。

右から招待客の性格変化は一目瞭然であり、筆頭に記される渡部筑後守正は、三〇〇〇石の旗本で、鶴拝領時に上使を務めたものである。役職的には御使番に過ぎない。他の者達は佐竹氏の縁類の者達や幕府の旗本などである。こ

の旗本達は、おそらく日頃藩当局へ種々情報を提供するなど、便宜を計る者達ではなかったろうか。よって、参加者は、いずれも藩と関わりのある、いうならば「両敬」関係にあるものなどが招かれたといえる。<sup>(19)</sup> 秋田藩の場合、こうした参加者の変化がいつから起こったものか明らかでないが（『国典類抄』から寛永・正保・承応の拝領も確認できるが、招待客に関する記載がみられない）、万治三年（一六六〇）以降の史料からは老中の参加を確認できない。すべての藩において、「御鷹之鶴」の拝領にともなう老中招請が全く見られ無くなるわけではなからうが、老中招請が前述のように將軍宣下・転任、將軍世子の元服・官位叙任、大名家の家督相続の場などに次第に限定され、「御鷹之鳥」の振舞いの場が、その対象から外れていく状況があったのではなからうか。

なお、譜代藩阿部家における「御鷹之雁」「御鷹之雲雀」の取り扱い状況を『公餘録』（兎玉幸多『阿部家史料集二』）によって確認するならば、貞享二年（一六八五）十二月九日の「御鷹之雁」の御振舞いにおいて老中大久保加賀守忠朝・戸田山城守忠昌を招いているケースを確認できるが、同書に見られる老中招請はこれ一回のみである。享保期以降になると御一門衆などへ振舞うことも希にはあるが、大半は家中への振舞いに限定されるようである。

したがって、問題は將軍からの「御鷹之鳥」の振舞いの場の構成員、ことに主客が変化することの意味である。右の変化はこの儀礼行為の意義そのものの転換を意味するのではない。すなわち、老中をはじめ幕閣のものを招いて開かれる「御鷹之鶴」の「御振舞」の場は、あくまで幕府向けの振舞いの場であつたといえる。つまり、振舞いは拝領に対する答礼の意味が強く、老中たちも將軍の代人的役割を負っているといえよう。これに対して、先の寛文期の振舞いは、上客の一人として鶴を持ち運んだ御使番が招かれるものの、これ以外はすべて佐竹氏の縁類や友好な関係にある幕臣などである。かかる形態のもとでは、將軍から拝領した「御鷹之鶴」を藩主を中心に関係者がともに祝い楽しむという色彩が強い。振舞いの場の性格は、幕府向けから藩主を中心とする類縁者との祝いの場としての性格を

強くすると見てよからう。その背景には幕藩間の緊張関係の緩和などがあると考えられる。

なお、右の変化は老中などに止まらず、様々なより多くの人々が將軍からの「御鷹之鶴」の振舞いを受けることを意味する。「御鷹之鳥」の拝領には家格にもとづく細かな基準あり、御三家・国持衆など上位の大名のみが下賜対象となり、多数の大名・幕臣などが「御鷹之鳥」を食する機会はなかったが、右の転換によりその機会を得たといえる。なお、こうした客質の変化は、一見すると儀礼的な場の形骸化の指標として捉えられがちであるが、むしろモノを食するという行為を通じて將軍の存在を体感する場がより多くの人々に解放されたとしてもできよう。そうした形がおそくとも寛文期には見られたわけである。

もう一点留意したい点は、「御鷹之鳥」を拝領すれば、ほかならず振舞いの場を設けなければならなかったという点である。<sup>(15)</sup>將軍から「御鷹之鳥」を拝領した以上、振舞いの場を設定することから逃れることができず、そこには一定の強制力が働いていたと見てよからう。かかるものでは、モノを食するという行為を通じて將軍の存在を体感する場を、何故幕府が設定したのかという点が改めて問題になるが、この点については章を改め後述したい。

さて、以上のような場の変化を念頭に寛文六年の場の様態を引続き確認するならば、右の変化についての論点をさらに補強する二・三の点に気づく。

一つは招待客のなかに年少者が少なくないことである。黒田専之助は当時七歳、岩城権之助景隆は当時一二歳である。そして、こうした傾向はこの年に限られたわけではなく、以後も振舞いの場で汎く見られる。しかも、彼らは親子で参加する場合もあり、幼くして当主になったために、参加するといったものではない。この点も「御鷹之鶴」の振舞いの場の性格の変化に伴い、類縁のものなどの参加が可能になった結果と考えられる。場の設定を強制される面があるとはいえ、招待客の選択権は藩側にあったわけである。なお、年少者を呼ぶ理由については確証がないが、能

楽との関連を考えるべきであらうか。能が武家の式楽として重んじられたことと無関係でないように思われる。少なくとも振舞いの場は、子供達にとって、能楽をはじめとする儀礼的な場を学習する絶好の機会となっていたことは間違いない。<sup>(16)</sup>

もう一点確認しておきたい点は幕府による振舞いの場の統制である。これは、先の振舞いの場の質的な変化とも密接に関係する。まずは、寛文三年（一六六三）九月の、次の法令に注目したい。<sup>(17)</sup>

#### 振舞膳部之覺

一 御鷹之鳥拝領披之時、老中於招請は、檜之木具、盃台三迄は不苦、三汁十菜、向詰香物、吸物、并肴五種、押物、但内々にて披之時、又は老中招請たりといふとも、常々振舞には可為塗膳、向詰は無用事

一 雖為国持大名、不時之振舞ハ二汁七菜たるへし、小身之面々ハ縦兼日より雖為約諾、此數量を用へし、惣て後段吸物肴等もかるく可被仕事

附、振舞之刻又ハ常にも、杉重之菓子ハ可為無用、折櫃物は不苦事

一 組中振舞又ハ相役人等寄合之節は、二汁五菜に過へからざる事、以上

#### 九月

右から二、三の点を指摘したい。一つは当該期幕府が振舞いの席の取締りを目論んでいたことである。その対象は「御鷹之鳥」の振舞いの場に限られないが、史料を見る限り、「御鷹之鳥」の振舞いの場が主要な対象であったことは間違いない。また、右からは寛文期に至っても「御鷹之鳥」の振舞いに老中を招請したことが明らかであるが、引用史料が「御鷹之鳥」の振舞いの場のみを取り上げ、將軍宣下などの老中招請の場を取締りの対象としていない点からは、老中招請を伴う他の振舞いの席と「御鷹之鳥」の振舞いの席とを区別する指向がこの段階にすでにあったといえ

よう。「御鷹之鳥」の振舞いの場に、老中を招かなくなる背景にはこうした状況もあったのである。

さらに、法令發布の前提として、老中招請などを伴う「御鷹之鳥」の振舞いの場がたいへん盛大であったことを指摘できるが、この点は振舞いの場が幕府向けであり、より盛大であることを指向したとした既述の検討とも合致する。しかし、寛文期に至ると従来のような盛大な祝宴を求める姿勢から、統制色を強めるわけであり、「御鷹之鳥」の振舞いの場面は、幕府の饗応に関する規定に従い実施が義務づけられたといえる。この目的の一つには大名の饗応が、幕府の振舞いの席以上に華美になることを阻止することがある。身分や家格に応じて振舞いの場すらも統制され、幕府のもとに序列化を強制されていたのである。この点は幕藩関係の安定化にともない、大名統制のあり方が質的な転化を遂げつつあることを示している。

なお、こうした新たな統制にかわって注意を要するのは、右の元和八年、寛文六年の例では明らかでないが、「御鷹之鳥」の振舞いの場とは、藩主と招かれた客が一堂に会する形を取るのではなく、客の格によって振舞いの場が異なった点である。延宝二年（一六七四）十一月二十七日の「御鷹之鳥」の振舞いでは、客の格に応じて振舞いの場を「御広間御振舞」「御座之間御振舞」「御座之間次御座敷御振舞」の三つにわけて<sup>(18)</sup>いる。この部屋の違いは料理の品数の違いでもある。幕府によって老中の料理の品数が決められることは、そのもとにすべての参加者のもてなし方が規定されることであり、振舞いの場全体を幕府が規定したといえる。言い換えれば、「御鷹之鳥」拝領の際には、少なくともこれに相当する規模の披露の場を設けることが、大名に強制されたわけである。

以上の点からは、振舞いの場が藩主を中心とする類縁者との祝いの場としての性格を強めても、そこには一貫する幕府の統制への意志を見ることができる。また、振舞いには家格・身分などによって部屋を異にするなどの序列が存在したが、その序列は藩内における序列ではない。佐竹の大名屋敷において、將軍を核として部屋・席次が決ったと

いえる。江戸における「御鷹之鶴」の振舞いの場とは、藩主を中心とする類縁のものの集まりの場となつても、將軍不在の席で將軍を感じながら自己の位置を確認する場として存在したといえようか。

ところで、「御鷹之鶴」の拝領に伴う振舞いの場は、江戸の武家社会においてどれほど行なわれていたのであろうか。詳細は不明であるが、他に下賜される雁や雲雀なども合わせて勘案するに、その場は最低でも年間五〇箇所を越えたと見られる。しかも、雁や雲雀の格は鶴より劣るものの、披露の方法は鶴に準じたものであり、將軍からの「御鷹之鳥」をめぐり、極めて多数の飲食の場が毎年設定されたことは間違いない。振舞いの場の意義や幕府による振舞いの場の統制は、こうした「御鷹之鳥」拝領の規模も念頭に捉えることが必要である。

なお、大名が江戸屋敷の家中のものに振舞う場面も存在したが、それは中心的なものではなかった。万治三年（一六六〇）十月二十七日の「御鷹之鶴」の拝領では、十一月二日に「御拝領之鶴御披」があり、同五日に鶴の料理の御流が、家臣に振舞われている。しかし、招待客を招いた折には、家臣はその接待に追われるわけであり、後日の振舞いはあくまでも「御流れ」に過ぎなかったのである。

以上、前期の江戸での鶴拝領について触れてきたが、これまでの問題点の整理を兼ねながら、その後の様子を概観するならば、將軍綱吉時代には生類憐み政策の展開により拝領箇所・件数は次第に減少し、元禄五年（一六九二）をもつて「御鷹之鶴」のみならず、すべての「御鷹之鳥」の下賜が停止し、「御拝領之鶴御披」、その振舞いの場も消失した。それは將軍の威光を体感する場の減少を意味しよう。しかし、將軍の威光を実感する場が全体として減少したかという点、そうともいえない。能の振舞いが、この時期盛んになる。綱吉期は將軍の好みから能が盛んに舞われ、能楽史の観点からも大きな画期とされるが、諸大名を集めて殿中で將軍が能を振舞うと、諸大名はこれを受けて江戸屋敷において盛大に能を興行するのであった。たとえば、「徳川実紀」貞享三年六月二十七日の条には、「万石以上父

子、并に高家、三番頭はじめ、布衣以上以下の諸有司をめして、散楽を見せしめられ饗をたまふ、御みづから邯鄲、舟弁慶、猩々、乱をまはせたまひ、阿部豊後守正武は桜川、善知鳥、牧野美濃守成時は高砂、頼政をつかふまつる、この日五万石以上は菓子、魚物を献ず」とあり、將軍綱吉が、江戸城において極めて盛大な能の振舞いの場を設けたことが明らかである。その場の構成は能楽の鑑賞と共同飲食の場からなっており、両者が一体となつて振舞いの場が構成される。そして、この振舞いを受けた佐竹家では同年七月二十六日、これまた盛大な能の振舞いの場を設けており、招待客は親戚・幕府役人など一五〇名を数えた。また、「若殿」(義格か)自らも舞つてゐる<sup>(20)</sup>。なお、当時家老を勤めた浜江宇右衛門隆光の「御家老勤中日記」<sup>(21)</sup>の七月十日の条には、「先月廿七日御能御拝見ニ付御大名様方御能被遊候筈ニ候」と見えており、こうした振舞い能が佐竹の大名屋敷でのみ行われたわけではない。江戸城において振舞いを受けた諸大名は、その規模に違いなどはあるが等しく振舞いの場を持ったのである。佐竹家ではこれ以外にも貞享期頻繁に振舞い能を催しており、そこには親類縁者はもちろんのこと出入の商人の参加も確認できるのである。

「御鷹之鳥」の振舞いでは、能あるいは謡は欠かせぬものであり、「御鷹之鳥」の下賜停止後、はからずも能のみ残つたとの感もある。しかも、その場面は極めて盛大であり、また、將軍から能の振舞いを請けると、諸大名がさらに縁者や下位のものを対象にして能の振舞いの場を設けるというあり方には、「御鷹之鳥」の振舞いの場との同質性を指摘することもできる。ここでいう同質性とは、能の振舞いや「御鷹之鳥」の下賜を受けると、藩主はそれを私の楽しみとして受け入れることは許されず、それをより多くの人々に分ち与えねばならなかったという点にある。そして、おそらくは、ここに見られる共通性は、右の二つに限られるものではなく、すべての振舞いや贈答行為(これも振舞いの場に連なる)に共通する基本的な性格であつたといえようか。本稿が問題とする近世の御振舞いの構造分析は、一つの振舞いの場そのものの構造分析と、こうした連鎖性の分析にあると考える。



さて、「御鷹之鳥」の諸大名屋敷での振舞いが途絶えても、將軍の意を体した形で能興行が汎く実施された。一面的ではあるが網吉期は「御鷹之鳥」の振舞いから、能の振舞いへと転化した時代ともいえるのではないか。それは軍事的な要素の濃い鷹狩を前提とする儀礼から、文芸を基本とする儀礼への転換でもあったわけである。

享保期、鷹狩は復活するが、江戸での「御鷹之鶴」の拝領は途絶えたままとなる（御三家・加賀前田などが拝領するのみであった）。鶴の振舞いの場も当然ながら見られなくなる。「御鷹之雁」「御鷹之雲雀」の振舞いの場は復活するが、「御鷹之鳥」のうちで最も格が高い「御鷹之鶴」の振舞いの場の消失をどのように捉えるかが問題である。また、国元での鶴の宿継拝領は、享保の復活以降、元禄の中断以前よりも盛んになる。享保期の再興は単なる復活ではなく、そこに積極的な意志の存在も考えねばならない。なお、塚本氏は享保以降の鷹を通じた支配が関東に限定されたと指摘するが、鷹をめぐる贈答行為は、むしろ吉宗期に国元拝領を重視するなど、江戸・関東以外へ広がりを見せる。贈答行為そのものの理解にも関わるが、これらの点を、次節の国元拝領に関する具体的な検討のなかで考えてみたい。

## 二 「御鷹之鶴」の宿継拝領と御振舞い

### (一) 寛文九年の宿継拝領

藩主が在国中に宿継によって「御鷹之鳥」を拝領する場合について、ここでは検討したい。この形態の拝領を文書では「宿継拝領」「宿継鶴拝領」などと記し、拝領の対象となる「御鷹之鳥」はほぼ鶴に限られる。「御鷹之鳥」のうち雁・雲雀などは国元拝領の対象とはならない。また、国元で拝領する形態は、在府中の拝領に比して、より一層、格の高い拝領形態といえる。旧稿<sup>(23)</sup>でも指摘したように代替りした国持大名の「御鷹之鶴」拝領は、まず江戸拝領から

始まり、一定の年限を経、官位官職などの条件を満たした段階で初めて国元拝領となる。そのため、近世前期においては、江戸拝領に比して国元での拝領の回数はかなり少ない。佐竹氏の場合も前掲第一表の通り享保以前は確認の範囲であるが五回に過ぎない。すなわち、初代義宣が大御所秀忠より寛永元・三・五年に拝領したケースと、二代藩主義隆が將軍家綱から寛文九・十一年に拝領したケースである。また、一定の条件を満たしてはじめて国元に遣わされる「御鷹之鶴」は、極めて希な拝領であることから格の高い存在とされていた。もちろん、幕府側も將軍が国元に遣わす拝領を格の高い拝領と認識していたことは間違いない。

しかし、享保期以降になると前述のごとく「御鷹之鶴」の江戸拝領は姿を消すものの、宿継拝領は、五代藩主義峯が將軍吉宗から享保十二・十四・十七・十八年、元文五年、寛保三年に、七代藩主義明が宝暦六年に、八代義敦が明和二・八年、安永六年というように、その拝領回数が増える。ことに吉宗の時代にその回数が多いことが注目される。何故、江戸拝領を停止し、宿継拝領を数年に一度という形で定例化していったのであろうか。この点が、振舞いの問題を考える上でも大きいことは間違いない。これらを念頭に宿継拝領の一端を明らかにし、またその行為の持つ意義についても考えてみたい。

初代義宣時代の「御鷹之鶴」の拝領については、詳細が不明であるので、まず、寛文九年の場合を例に、その概略を確認してみたい。次に「国典類抄」に見られる「多賀谷左兵衛隆家御家老勤中日記」の記事を示そう。<sup>(24)</sup>

寛文九年己酉十一月七日

一朝江戸より御飛脚罷下候ニ梅津与左衛門より連状参候、今度以宿次 御奉書并御鷹之鶴 屋形様御拝領之由  
申来候、四ツ已前登 城申候、四ツ程從江戸美濃様・但馬様御手付ニ而宿次之御手形并酒井雅楽頭様・阿部豊  
後守様・稲葉美濃守様・土屋但馬守様御名付之御奉書并御鷹之鶴致着候、大関半三郎付添参候、御上段ニ而鶴

御頂戴被遊候、何も表立候衆、御珍重ニ登 城申候、御代初而之義ニ候間、主計殿・淡路殿ニは御参府候様  
ニと書状越候、其外在々衆は使者飛脚ニ而被 仰上候様ニと申越候、今度御鷹之鶴 御拝領御札之御使者ニ須  
田主膳為御登可被成由 御意候間、横手江半右衛門同書ニ以御飛脚書状越候、早々主膳此方江被参候様ニと申  
越候

(中略)

同十日

一朝常之如登 城申候、須田主膳江戸江之御状被相渡鶴御拝領御札御使者被仰付候、昼立ニ被参候

同十一日

一茂木筑後使札、宮内より状斗、小瀬長三郎・赤坂忠兵衛・松野二郎左衛門以飛脚鶴 御拝領御珍重之由被申上  
候通、達上聞候、何も返答申候、中略 鶴御拝領ニ付佐竹左衛門殿病氣故御登無之由御状被下候、大山因幡・  
今宮撰津守・同織部以飛脚被申越候、涼松院よりも状給候、能代より山方奎之助・中村十郎兵衛以飛脚状越申  
候

同十三日

一佐竹淡路殿より使者参候、今度鶴 御拝領御珍重ニ昨晩着候由為御知候、古内茂右衛門・小野崎伊織大館より  
以飛脚書状、真壁右衛門より使者を以連状被指越候、朝如常登城申候、佐竹主計殿・同淡路殿ニも登 城被成  
鶴 御拝領之御珍重被仰上、其次ニ而右衛門・茂右衛門・伊織使者飛脚之段遂披露候

同十四日

一明日鶴御披ニ付、佐竹主計・同山城・同淡路・同將監、其外御引渡・廻座、役人物頭医者以上人数七拾九人御

書付出、明九ツ程致登 城、御料理被下候様ニと被仰出候、七ツ程帰宅候

同十五日

一（前略）九ツ程登 城申候、御城御広間ニ御引渡・廻座、御縁通ニ御物頭役人衆・横目衆御料理被下候、御囃子五番被仰付候、七ツ半帰宅

『徳川実紀』によれば、寛文九年閏十月二十七日の条に、「佐竹修理大夫義隆今年初て在封により鶴を賜ふ」とみえる。二代藩主義隆は、江戸ではすでに度々「御鷹之鶴」を拝領したが、国元での拝領はこの時が初めてであったわけである。国持大名が国元で拝領するには官位官職が従四位、少将以上が条件であり、義隆が侍従から少将に昇進したのは寛文六年（一六六六）であった。そのため寛永十年（一六三三）に藩主となったものの、この間、国元での拝領には至らなかったわけである。

さて、この寛文九年の「御鷹之鶴」は、右掲史料に明らかなように、老中の宿継手形と「御鷹之鶴」下賜を命じる老中連署奉書（署名は大老酒井雅楽頭忠清、阿部豊後守忠秋、稲葉美濃守正則、土屋但馬守数直）とともに十一月七日に秋田に届いた。連署奉書には、酒井忠清・阿部忠秋も署名するが、兩人は寛文六年三月二十九日以降「尋常の奉書」には連署不用とされており、右への署名からは「御鷹之鶴」の下賜を幕府でも重視したことが明らかである。なお、江戸城へ出頭しての拝領手続、江戸藩邸での取り扱いなど注目すべき場の一つといえるが、この年の動向については不明である。鶴は藩邸御座之間上段で授受の儀式が取り行なわれ、拝受したことになる<sup>(25)</sup>。

さて、鶴の到着に従い家中上位のものへは登城が命じられ、一門で所預りの佐竹主計（佐竹北家、角館）、佐竹淡路（佐竹南家、湯沢）へも「参府」＝登城が命じられた。また、その他の「在々衆」、ことに引渡衆や廻座衆は使者飛脚にて挨拶することが命じられた。十日には江戸へ御札の使者須田主膳が出立している。十一・十三日などには、先の

祝儀挨拶の指示に従い、各所から使札や飛札による挨拶があり、十四日に至り「鶴御披」が催された。参加者は佐竹主計、同山城（佐竹東家）、同淡路、将監（多賀谷隆長、檜山、当時家老）、そして引渡衆、廻座衆、役人物頭、医者以上の者七九名であった。引渡衆、廻座衆などは大広間で、物頭役人などは御縁通で振舞いがなされた。

この時の記録も必ずしも充分に残っているわけではないが、右からは大まかではあるがその概要が明らかである。<sup>(26)</sup>

そこで、江戸藩邸での御振舞い同様、共同飲食の場への参加者の性格と、その場の構造について少しく検討したい。まず、確認したい点は、飲食の場への参加者が、一門のものを始めとする家臣団であった点である。これを当然とすることもできようが、江戸の振舞いが、家臣団を基本的に対象外としたことを想起するならばこの意味は大きい。

なお、江戸の振舞いでは史料上、「御鷹之鶴御振舞」・「御拝領之鶴御振舞」と記されるが、国元では「御振舞」という文言より先の引用史料にも見えるように「鶴御披三付」・「御料理被下候」などと記されることが少なくない。いづれも能や囃子が認められ、共同飲食の場であることに変わりはないが、こうした文言の使い分けからも、その場の性格が異なることを指摘できよう。すなわち、改めて確認することになるが、江戸拝領は幕府関係者・親類縁者への振舞いが基本であり、宿継拝領は藩主が拝領した鶴を家臣団へ饗することにあつたといえる。

さらに振舞いの場への参加者に注目するならば、引渡衆である佐竹一門四家、引渡衆、廻座衆、役人物頭、医者以上の者七九名であった。家中のものが勢ぞろいして祝う形はとっていない。振舞い、あるいは御相伴に預かるものは、かなり上位のものであり、他の多くは振舞いの場への参加が叶わなかったのである。しかも、参加した引渡衆、廻座衆などは大広間に、物頭役人などは御縁通に詰めており、家格によってその席を異にした。共同飲食の場も別食を前提とした共同飲食の場である。そこには武家社会の構造そのものが如実に反映していたといえよう。

ところで、こうした編成方法は一見すると江戸の場合と同様であるかのように捉えられるが、家中のみを対象に殷

席を決める場合と、様々な家のものを対象に殿席を決める場合とはその基準が異なる。すなわち、国元拝領ではその核が藩主であるが、江戸拝領は前述のごとく將軍である。よって、享保期に「御鷹之鶴」の宿継拝領のみが復活した理由を、より積極的に解するならば、藩主を中心とした家中の序列化の問題と密接に関係していると見ることもできるのである。

## (二) 御振舞いと家格制

つぎに、寛文期から六〇年ほどを経て、復活する享保期の宿継拝領を例に、振舞いの場の分析を行い、そのなかで当時の藩の家格統制上の問題を明らかにしてみたい。また、そうした検討を通じ、あらためて宿継拝領の意義を考えたい。

なお、すでに先に示した寛文九年の史料からも明らかのように共同飲食の場の分析には、同藩の家格制についての理解が不可欠である。検討のための前提として、まず、この点を根岸茂夫氏による一連の成果<sup>(27)</sup>によって確認しておきたい。

さて、同藩で設定した家格には引渡・廻座・一騎・駄輩・不肖という五つがあった。引渡は御苗字衆四家（佐竹北家、佐竹南家、佐竹東家、佐竹小場家）を始めとする一門とこれに準ずる家約二〇家で、毎年正月城中祝儀の席において左右に列び、引渡御膳、すなわち三つ重ねの盃を添えた本膳で饗応を受けた家である。廻座は、譜代の老臣・勲功諸士の子孫約五〇家で、同じく祝儀の席で順に藩主の前に進み盃を賜る家柄であった。これらの中における席次は、各家臣団の由緒・格式によって決定され、本来、殿中での席次に過ぎなかったものが、藩内身分序列を示すものとなった。右より下位の家柄は、知行高一五〇石以上を一騎、七〇石以上を駄輩、三〇石以上を不肖というように、知行高を基準とした軍役負担の量をもって設定されたという。また、ことに引渡、廻座に関する分析では、一門支流を家臣

団として位置付け、その自律的な展開を止揚し、そのいつぱうで他の譜代や、新参のものを達を擬制的な佐竹を中心とする家集団として捉え込み、各家の由緒・格式を改変・剥奪し、宗主家が家格的身分編成を行う上で都合のよいものにしていったという。しかし、各家の由緒・格式を改変・剥奪といった、イエの存続そのものに関わる措置に対して、必ずしもことが順調に進むわけではなかった。家格をめぐる家間の紛争や藩に対する確認が多数みられた。単純に家格制が敷かれ、それが二〇〇年間以上安定的に家のあり方を規定するというものではなかったわけである。

さて、將軍吉宗の鷹狩の再興にともない、「御鷹之鳥」の拝領も次第に復活するが、享保十年頃になると他の国持大名なども「御鷹之鶴」を宿継拝領することになり、秋田藩でも受け入れ体制を整える準備に入る。「国典類抄」に収録された「今宮大学義透御家老勤中日記」<sup>(28)</sup>によれば、享保十年二月九日、大小姓頭矢田野治部、御用人根岸惣内、留守居小川茂左衛門が旧記を取り調べその準備に当ることを命じられ、家老の指揮のもとその調査・立案に乗り出した。その過程で最も大きな問題となったのが、振舞いの場の問題である。右の日記、享保十年二月十八日の条には、次のように見える。

(前略) 鑑照院様御代鶴御披之次第吟味仕候所ニ、在々より引渡等被 召登候様ニ相見得申候得共、御時節柄故、態と被召登候ニは及申間敷候、其上淡路・石見座列等之障も御座候、左候得は御城下ニ罷有候引渡・廻座江被下候事も、又在々江相障申候、両番頭ニ被下候而も重立候事故、外之廻座歴々相障申候、両番頭は 徳雲院様御代より之新役ニ御座候、依之私共相談仕候は、將監同役共御相手番不残、当番之両番頭寺社奉行老人御相伴被仰付可然哉と存候、ケ様之儀品々相障候儀御座候故、御事輕キ様ニ候得共、右之通より外は有御座間敷哉と申上候得は可然被 思召候、鶴 御拝領之御用掛之者共江は、頂戴被仰付、相障間敷哉と 御意ニ候故、私共内々左様存申候間、御用掛之者ニ被下候段御尤ニ奉存候段申上候、役人共は如何と御意ニ候故、惣牀ニ而は相障申候、一

役より老人宛は是以相障申間敷と申上候（中略）、主計・淡路・石見江は鶴御配分被下可然奉存候と申上候得は、申上候通宜被思召候、三人江は以上使御配分被下度と御意被遊候、

右の記事は、鶴の御披についての考えを家老達が藩主に伝え、その上で家老・藩主が対策を練っているものである。国元での拝領は、寛文十一年の拝領後、途絶えており、ほぼ六〇年ぶりの拝領となるが、鶴の御披に伴う近世中期の藩内の家格問題が赤裸々に示され興味深い。また、ここから「御鷹之鶴」の場の政治・社会的な意義の一端を窺うこともできよう。

まず記事内容を確認したい。（一）鑑照院（二代藩主義隆）の時代の鶴の御披について吟味したところ、在々より「引渡」なども城中に招き振舞いの場を持った。（二）しかし、財政難から藩政改革中であり、在々より「引渡」を招く必要はないのではないか。（三）また、一門の佐竹南家（淡路）と佐竹小場家（石見）の座列についても支障があるため、城下の引渡・廻座衆へ振舞うことも、また城下以外の在々の廻座衆へ振舞うことも障りとなる。四徳雲院（三代藩主義処）の時に設置された新役両番頭を招くことも「御鷹之鶴」の振舞いという重い場面であるため、外の廻座衆歴々の障りとなる。（四）よって、私達（家老）は相談の上、「御鷹之鶴」の御披には、将監（多賀谷）、および同役で御相手番を勤めるもの、当番の両番頭・寺社奉行一人ずつを御相伴に命じること、鶴の御披の場が軽いものとなるが、これ以外に方法がないことを藩主へ申し上げた。（五）藩主は、一応了解した上で、鶴拝領の御用掛の者への振舞いを求め、家老達も賛成した。藩主はさらに役人の参加についても確認し、家老達は一役より一人の割合であるならば参加が可能であるとの考えを示した。（六）不参加となる一門の佐竹主計・同淡路・同石見へは使者をもって鶴を配分することとした。

右では佐竹南家（淡路）と佐竹小場家（石見）の座列争論のために、本来の「御鷹之鶴」の御披が実施不可能とな



り、その善後策を練っているのであるが、問題を二点に絞って考えたい。一つは家格制と振舞いの場の問題、もう一点は家老・藩主が行き詰まるなかで考えた善後策の性格についてである。

まず、第一の点であるが、寛文九年には佐竹主計、同山城、同淡路、同将監、そして御引渡衆、廻座衆、役人物頭、医者以上のものが参加しており、引用史料にあるように過去には在々の引渡衆なども参加したことは間違いないだろう。しかし、この享保の相談の場では、座列争論の存在から在々の「引渡」はもちろんのこと、城下の引渡・廻座衆への振舞いにも支障があるとされた。財政改革中であることも理由の一つに上げられるが、これは座列争論が問題であることを顕在化させないための建前的な、あるいは二次的な理由といえる。

史料では佐竹南家（淡路）と佐竹小場家（石見）の座列争論が大きな問題として描かれ、その波及も問題視されている。座列の問題はこの両家に限らず、他にも吹き出し兼ねない問題が存在したのである。<sup>(29)</sup> また、家格制は藩主を頂点とする身分的な序列を維持するためのものであるため、一つの綻びが、秩序全体に影響を与え、藩主の存在そのものすら動揺させ兼ねないといえる。では、「御鷹之鶴」の振舞いの場の設定を意図したとき、何故ことさらに座列が問題となるのか。この点は、こうした振舞いの場が単に交流の場として存在するのではなく、その本質において序列の確認、集団内における自己の位置の確認の場となる性格を有していたということであろう。

振舞いの場のこうした性格故に、その設営に苦慮した藩主・家老はいかなる基準で参加者を招き、鶴の御披の場を設けようとしたのだろうか。城下や在々の引渡・廻座衆の参加を断念しており、まず、家格に準じて振舞う方法が採れなくなっていることを確認しなければならぬ。議論の末、考え出された参加基準は、御相手番、当番の両番頭・寺社奉行一人ずつ、鶴拝領の御用掛の者、役人一役につき一人というものであり、参加者が役職や御用の内容を基準に決定していることが明らかである。つまり、家柄に応じたものから、役職・御用に応じた参加基準が示されたとい

える。これは近世中期頃より幕府でも見られてくる家格重視から能力重視による人材登用、職務運営という流れにも沿うものである。社会的な大きな流れであつたことは間違いない。儀礼的な振舞いの場は藩主を中心とする序列の確認の場であると指摘したが、その序列とは決して固定的なものではなく、こうした動きのなかで、また再編されて行くことも間違いない。享保期に再興される「御鷹之鶴」の国元拝領とは、將軍權威を背景に新しい藩内序列を再確認する場としての役割を果たしたと見てよいのではないか。また、それは大名家中をも含めた徳川將軍家への壮大な統合の儀礼の場でもあつたわけである。

なお、佐竹南家（淡路）と佐竹小場家（石見）の座列争論は、藩内では收拾できず、將軍への謁見の座順問題から元文期に一応の決着を見るのである。<sup>(30)</sup>

以上、国元での「御鷹之鶴」の振舞いは、藩主が家中上位のものを招き振舞う場であり、その場が序列や家格といったものを確認し固定化する機能を果たすことを確認できたことと思う。藩主と家老達の問答からは、当時の人々も、そうした機能を果たすことを、充分に承知していたことも明らかであつた。なお、宴席への参加者は、上位のものなだけに限られるが、振舞いを受けたものは、すでに第一節で指摘したように、さらに下級のもの達や自らの家臣に振舞わねばならなかつた。右の藩主と家老の問答のなかで振舞いの席に招かぬ一門の佐竹主計・同淡路・同石見へは使者をもって鶴を配分することとしているが、こうした配分を受ければ、これを自らの家臣に振舞う共同飲食の場を持つたことは想像に難くない。近世における共食の構造とは、少なくともこれまで扱ってきた限りにおいては、主催者たる將軍や藩主の元に全ての家臣が平等に存在するのではなく、ピラミッド型の階層的な構造を取り、連鎖的に広がるものであつた。享保期の「御鷹之鳥」の下賜はこうした贈答儀礼の慣行に乗っ取って導入され、その機能が期待されたわけである。

## 三 近世における「御鷹之鶴」観念と將軍權威

「御鷹之鳥」は、共同飲食の形をとって饗されることから明らかなように、下賜はあくまで食することを目的とする。剥製にして鑑賞するといったことではなかった。また、下賜された鳥が、空腹を満たす食糧、あるいは味覚を樂しませるという、その類のものでもなかった。「御鷹之鶴」に代表される將軍下賜の鳥の共同飲食は、あくまで儀礼的なものであったといえる。では、それはなぜ鶴であるのか。そこにも一定の意味があったはずである。

元禄期に記された『本朝食鑑』によれば、鶴は千年を生きる仙獸であり、長寿の薬として迎えられている。こうした意味では、旧稿で示した「公儀向聞書」に、隠居した保科正之・阿部忠秋などに鶴を下賜する記事が見えたが、年老いた功勞の臣に贈るに鶴は最もふさわしいものであったといえる。

また、鶴に対する同様の認識から將軍とは無関係に、藩主が独自に家中に鶴を振舞うケースも見られた。岡山池田家文庫の元禄八年（一六九五）「塩鶴頂戴留」によれば、同年藩主から家中へ塩鶴が下賜され、その数は男一一五人、女一五〇人に及んでいる。下賜対象者は、七〇から七九歳のものが二〇六人、八〇から八九歳のものが五九人といずれもが高齡者である。施策として高齡者を対象に下賜したものであろうが、その対象人数の多さからは下賜の前提として当時の人々が鶴を長寿をもたらしものと認識していたことが窺える。右などの行為は、こうした認識に基づいてはじめて理解できる。また、この点は殺生を禁じられた鶴を捕獲して食するという、いわゆる「鶴殺し」事件が各所に存在することからも推察されるのである。<sup>(32)</sup>

こうした鶴認識がみられた社会では、藩主から家臣への鶴の振舞いが、家臣の長寿を保証することになる。極論す

るならば、健康と長寿を藩主が授けるという儀式でもある。そして、藩主のその行為を可能としているのが將軍である。將軍、そして藩主によつて長寿が保証される、そうした場として「御鷹之鶴」の御振舞いの場があつたのである。ところで、近世において鶴は賜るものとして存在した。村人町人達が下賜の対象となることはないが、天皇・公家、そして多くの大名やその家中のものも、勝手に捕獲できるものではなく、將軍・藩主から贈られるか、振舞いを受けるものであつた。近世の鶴の飲食儀礼の検討では、鶴がこうした存在であるとの理解が必要である。それでは、こうした身分制に規定された鶴とは、どのようなものとして当時の社会の中に立ち現れたのであろうか。具体例をもつて近世における「御鷹之鶴」觀念のあり方を一層探つてみたい。

將軍家光の出頭人として力を振つた阿部忠秋は、延宝三年（二六七五）五月三日七四歳をもつて没するが、これより五年前の寛文十年（二六七〇）頃より病氣勝ちとなり、寛文十一年十一月五日には養生のために封地忍への暇を賜つた。この折忠秋は將軍より「御鷹之鶴」や羊胎子の皮などを拝領し、七日に江戸を發して、八日に忍に到着した。そして、十二日に家中の者達へ「御鷹之鶴」を振舞う場を設けた。阿部家の記録「公餘録」<sup>(33)</sup>は、同日の振舞いの場において忠秋から家中へ、公儀への奉公に関する話があつたことを記す。すなわち、忠秋は同家が藩として合戦に参加していないことに鑑み（同家が万石以上となるのは寛永元年である）、然るべき機会にはたとえ家中のものが一人になつても幕府に対して奉公するよう訓じるのであつた。

このため、忠秋は「御鷹之鳥」拝領について「御鷹之鶴 御拝領杯ハ日本ニかそへて多無之、国持御一門之外二三人之事ニ而候」と、「御鷹之鶴」の拝領が、將軍からの特別な意向によることを強調する。幕府への奉公において精勤を求める際にも「御鷹之鶴頂戴之時々様段々被 仰付候ものをと存出し、老人成共御奉公相勤くれ候様ニ可仕候」と、「御鷹之鶴」の振舞いの場を想起するように要請する。長寿を保証すると認識された鶴を、將軍から送られ、そ

れを家中に振舞うという場面は、奉公の精勤を求めるに際し最も有効な場面であつたことは間違ひなからう。ここでは、藩・幕府への忠勤を求める格好の場として「御鷹之鶴」が利用されているのである。

さらに、もう一点「御鷹之鳥」についての当時の人々の認識の一端を示そう。

『徳川実紀』天和元年（一六八二）六月二十一日の条には、將軍綱吉が親裁した越後騒動に関する既述が見えるが、ここでも「御鷹之鳥」が大きな意味をもつものとして記される。

越後騒動は藩主松平光長の嫡子綱賢の死去に伴い、相続に絡んで引き起こされた国元家老小栗美作と永見大蔵を中心とする「お為方」による勢力争いであるが、江戸城における親裁の場面において、次のような質疑がなされた。

（堀田）筑前守正俊もて大蔵に仰下されしは、美作が奢侈の様聞え上べしとなり、大蔵答奉るは、主人光長が家例にて、年々公より御鷹の鳥給はるとき、家司どもまで会集して拝賜せしむることあり、然るを去年は諸家司には告ず、美作父子のみ頂戴せり、このこと小といへども、是にてかれが奢侈の大凡を察せられ、恩裁をたれ給へといふ、よて美作に其事をとせ給ふ、美作申けるは、こはみな大蔵、主馬などが嫉心より、かく何事も思ひたがへしなり、其時は内々にて宴をひらかれたるをもて、家長等を召出さず、愚臣父子は、ことさら懇遇をもて其宴にあづかりしにて、同僚のともがらを愚臣がをしとどめたるにあらずと申、其詞も終らざるに大蔵申は、しからばなど同列の家司等さへあづからぬ程の席に、美作父子、をのが家人まで召つれて、恩賜の鳥を頂戴せしめしや、すべてかれが巧弁をもて、理非を申掠ること皆此類なれば、先日より評定所にて、諸有司に聞え上侍ることゝも、みないつはりならざるやう、聞召たまはるべしと申ければ、美作答ふる詞なし、（後略）

記事はさらに少々続くが、江戸城中で將軍綱吉が親裁した越後騒動に関する質疑の大半は下賜された「御鷹之鳥」の取り扱いをめぐる問答であつたともいえる。少なくとも『徳川実紀』編纂者はそのように取りまとめたのである。

さて質疑のあり方からは、將軍から「御鷹之鳥」を藩主が拝領した場合は、家臣が会集して振舞いを受けることが慣例であるが、去年は家臣には告げられず、小栗美作父子や同家の家人のみが振舞いを受けたとする。これに対して小栗美作は内々に宴が催されるために諸家臣には告げなかったこと、当人達は藩主の意向で特別に宴に加わったとする。これに対して永見大藏は同僚の輩も参加しない宴席に美作父子の家人までもが列席していることを指摘し、美作の答弁が、すべて虚偽に満ちたものであることを訴える。

判決は従来の決定をひるがえし美作父子が切腹となり、また、他にも両派から多くの処罰者を出し、藩主光長も家臣の統率力欠如を理由に改易となつたが、真偽のほどはともかく右の文章構成のあり方からは、「御鷹之鳥」の振舞いの問題が、事の真偽や正義のあり方を論ずるに足る存在として認識されていたことが明らかである。

また、右の質疑のあり方からは、藩主に下賜された「御鷹之鳥」は、ひろく家中のものが参会し、振舞うべきものとする認識が存在したことも明らかである。

藩主と家中による共同飲食は、正月などの年中行事のなかで、また藩主就任や藩主家の冠婚葬祭などにかかわって催されるが、將軍からの「御鷹之鳥」拝領に基づく国元での振舞いの場合は、右に述べた通り一段と意味深いものであつた。そこは藩主と家中の和合の場であると共に、阿部家のケースにも見られたように將軍―藩主―家中という形で結果を促し、序列を確認する場でもあつたといえよう。「御鷹之鳥」は、その場の象徴であり、「御鷹之鳥」が將軍になりかわつて將軍の威を体现しているということもできようか。しかもそれは、長寿をもたらす物として、個々の身体に宿るのである。

以上、「御鷹之鳥」が共同飲食されるものであることを踏まえながら、当時の「御鷹之鳥」観念、その存在の社会的価値について検討してみた。もちろん、その検討は、近世の身分制に規定された「御鷹之鳥」に対する観念の一端

であることを承知しているが、こうした前提を離れても鶴はその優美な姿や説話などから、親しまれ、神聖視されていたといえよう。そして、こうした意味での人々の伝統的な鶴観念と幕府の対応はやはり無関係ではない。

幕府は人々に鶴の殺生を禁じ、その一方で鶴を下賜するというように、鶴の生殺与奪権を掌握した。鶴が飛来する地域の大名などが一部捕獲権を有したが、そこでは多くの場合、初物の幕府献上が義務となっていた。鶴の捕獲も初物献上を前提として認められていたと見てよからう。まさに鶴捕獲権は將軍に独占されていたのである。さきに下賜された「御鷹之鳥」は、將軍の威を体现すると述べたが、鶴の生殺与奪権を掌握した將軍は、右とは逆に鶴を神聖視する伝統的な認識によつて、將軍自らを犯すことができぬ、神聖視されるものとする認識を人々に引き起こさせることになったのではないか。近年は自然の存在も天皇權威との関連で理解されることが見られるが、塚本氏が、網吉政權との関連で指摘されたように、<sup>(34)</sup>將軍權威を自然の支配權との関連で理解を深めることも必要といえる。人々の自然（この場合は鶴）に対する認識を前提として、その自然に対する裁量權を独占することにより、將軍はその自然の持つ神聖さを自らの内に取り込むことができたのではなからうか。また、伝統的な狩猟形態とも観念された鷹狩は、こうした鶴の神聖さを損なわぬ唯一の方法であつたといえよう。

### おわりに

近世の鷹が將軍を頂点する極めて巨大な贈答のサークルを形成し、そのサークルが幕藩体制下の礼的な秩序を維持する重要な装置のひとつとなつていたことは間違いない。本稿では、こうしたサークルの一端をなしている「御鷹之鶴」の振舞いの構造と「御鷹之鶴」観念のついて検討してきた。

振舞いのあり方については、いくつもの儀礼の連続のなかで進められる振舞いの場の構造そのものと、振舞いの場の連鎖性（振舞いの強制構造）という、二つの構造を追究することの重要性を指摘し、ことに別食を前提とする共食の問題や江戸拝領と宿継拝領における御振舞いの場の有する意義の相違について考えてみた。また、「御鷹之鶴」観念については、近世の身分制に規定された「御鷹之鶴」に対する理解が必要であることを指摘し、また、こうしたものとして鶴が位置づけられた背景には鶴を神聖視する伝統的意識があること、さらに將軍が鶴を独占することによって、自然（鶴）の持つ神聖さを自らの内に取り込み、自己の權威の上昇に利用したことを推察しておいた。各節において一応のまとめを行っているので、その内容を確認することはしないが、贈答のサークルの有するその広がり、想像を絶するものがあり、この検討もその隅を少しばかり突いたに過ぎないことを承知している。

また、中世と近世の饗応のあり方では、何が違うのか。<sup>(35)</sup>この点で最も注目したのは、飲食儀礼の連鎖制である。振舞いを受けたものがさらに振舞いの場を持つという振舞いの強制構造とでもいうあり方に、互酬的な関係を指摘することはできなかったが、保立氏などの中世史における贈与論を踏まえた研究成果と連続するものといえよう。<sup>(36)</sup>異質性の面では、幕府が饗応の場のあり方を様々な面で規制したことを上げなければならない。本稿は、幕府が饗応の場をいかに規制し、礼的秩序を維持するための装置としたのか、その追究であつたということもできる。残された課題は他にもあるが、今後、近世的贈与の体系そのものを追究するなかでさらに理解を深めてみたい。



## 註

- (1) 拙稿「鷹をめぐる贈答儀礼の構造―將軍(徳川)権威の側面―」(『国史学』一四八号、一九九二年)。
- (2) 拙稿「近世の献上儀礼にみる幕藩関係と村役」(徳川林政史研究所『研究紀要』二三号、一九八九年)。
- (3) 保立道久「庄園制的身分配置と社会史研究の課題―庄園制下の贈与・給養と客人款待―」(『歴史評論』三八〇号、一九八一年)。
- (4) 原田信男「食事の体系と共食・饗宴」(『日本の社会史』第八卷、生活感覚と社会、一九八七年三月、岩波書店)。
- (5) 將軍が催す諸大名への御振舞いには、將軍家の冠婚葬祭(誕生、元服、婚礼、葬儀など)、年中行事(五節句、謡初、八朔など)、そして將軍宣下、任官、世子などの官位官職などの任免昇進、日光社参完了後、殿中での能の振舞い、「御鷹之鳥」の振舞いなど、様々なものがある。もちろん、ここに列記したものは、いずれも大半の大名・旗本が参加する盛大なものであり、より内々のものとなれば切りがない。
- 藩の場合も多くは將軍家同様といえるが、注目されるのは、將軍家の祝賀に関わって、例えば將軍宣下・転任、將軍子息の誕生、任官昇進、婚礼、日光社参などの機会に、大規模な饗応の場を藩主が江戸藩邸で持ったことである。しかも、振舞いの対象は家中の者ではなく、他藩や幕臣で

あった。こうした場面では、老中など幕府の役人が招請された。老中を主客とする場であったといえる。藩が老中を招請して催す「御振舞」の場には、外に新藩主の就任祝いなどがあつたが、將軍家の祝賀に関する事項は、藩にとって新たな藩主の成立と同等の饗応の場を持たねばならぬ重要事項であつた。また、將軍家に殿中で振舞いを受けた大名が振舞いの場を持つことも少なくない。その場へは、將軍を招かぬまでも、老中・幕臣などを招き、縁類のものと一同にこれをもてなすことが見られる。こうした振舞いの場の連鎖的な展開は、食物の贈与を受けたものが、振舞いの場を設けることと同様といえる。こうした近世社会における振舞いの場の構造・意義の追究が課題といえる。

(6) 『国典類抄』(二三卷、六三二頁)には、雁の場合は初めて拝領した場合にのみ「表立御披」であり、その方法は鶴の場合と同じ、雲雀・梅首鶏はかならず表立った御披きの席を設けなければならないわけではなく、「御一門様方・御心安御方」、「御一家様計」で軽く「御披」を行うのが通例であつたとの記載が中期のこととして記される。

(7) 『国典類抄』は秋田県立図書館が刊行した全一九巻本を利用した。検討対象とした史料の多くは第一三巻に見られるものである。

(8) 『国典類抄』一三巻、六七二頁。

(9) 『本朝食鑑』(東洋文庫)二巻、一五一頁。『古事類苑』動物部五五二頁に見える「光台一覽」を参照。

(10) 『国典類抄』一三巻、六七三頁。

(11) 幕府出頭人と呼び得るものとして藤井讓治氏は、次のものの達をあげる(藤井讓治『日本の近世』3、一九九一年、中央公論社 第四章幕藩官僚制の形成参照)。徳川家康に仕えた本多正信・正純父子、大久保長安、秀忠に仕えた土井利勝、酒井忠世、井上正就、永井尚政、家光に仕えた酒井忠勝、松平信綱、阿部忠秋、堀田正盛、板倉勝重・重宗父子、松平正綱、伊丹康勝、島田利正、伊奈忠治、小堀政一である。将軍と彼らが中心となって進めた政治を出頭人政治とする。その特色などはともかく、元和八年の佐竹の「御鷹之鶴」の振舞いの席に多くの幕府重臣が呼ばれたものか確認できよう。

(12) 小川恭一編著『江戸幕藩大名家事典』下巻、一五五頁、原書房、一九九二年。

(13) 後年のことになるが、明和三年、佐竹氏は九月から十月にかけて、家治の転任、将軍宣下、子息家基の誕生、そして自らの家督相続にかかわって、老中招請の契応の場を設定するが、その経費は一万七〇〇〇両でも不足すると見積もっている。前述の「御鷹之鶴」の振舞いも、ほぼ同等と考えられ、その規模のほどが推し量れよう(『国典類抄』一一巻、九〇五頁)。

(14) 松方冬子「兩敬の研究」(『論集きんせい』一五号、一九九三年)。

(15) 「表立抜き」ではなく、「内証」でのお抜きといったことも希には見られるが、そこでもやはり来客があり、まったく来客が無いということはない。本来、「表立抜き」とはいかなる場合を指すものかその検討が必要といえる。

(16) たとえば、佐竹氏は、元禄元年三月、世子が江戸で拝領した「御鷹之雁」を国元で披露するに際して、家中のものにも振舞いの場を設け、その振舞いの場で舞われる能を見ることを広く認めている。すなわち、『国典類抄』(一一巻七一九頁)には「引渡・廻座衆之幼少之子とも衆ハ見物被仰付候」との記事が見える。また、武井協三「芸能を楽しむ人々―歌舞伎・浄瑠璃と能・狂言―」(『日本の近世』一一巻、一九九三年刊、中央公論社)は、やはり、寛文期の「御鷹之鳥」の拝領に伴う能興行の場を素描し「大名家でもよおされる能は、単なる娯楽をこえて、交際の大切な手段となっており、一つの儀式に近いものになりつつあったといえよう」とまとめているが、そもそも「御鷹之鳥」の御振舞いの場は儀礼的な色彩が強いものであったと考えた

(17) 『御触書寛保集成』一〇五四号。

(18) 『国典類抄』一三巻、六七七頁。

(19) 『岩波講座 能・狂言』I(能楽の歴史)、一一〇―

- 二一頁、一九八七年 岩波書店。
- (20) 『国典類抄』一一卷、六八五―七二三頁参照。
- (21) 『国典類抄』一一卷、六八五頁の引用史料による。
- (22) 塚本学著『生類をめぐる政治―元禄のフォークローア―、一三五頁（一九八三年、平凡社）。
- (23) 拙稿「鷹をめぐる贈答儀礼の構造―將軍（徳川）權威の側面」（『国史学』一四八号、一九九二年）。
- (24) 『国典類抄』第一三卷、六九〇―六九一頁。
- (25) 鶴は青竹に結わえられて下賜される。これは「鳥柴付け」（としばつけ）といい、鷹狩の獲物などを人に送る場合の作法であった（島田勇雄「食物儀礼における「菓子」「鳥類」」・『本朝食鑑』（東洋文庫）二卷、三二二頁）。
- (26) 後年の記録等によれば、先祖への報告として菩提寺などへ参拝、鶴包丁の実施、罪人への恩赦の措置、幕府の主要な役職のもの、縁類などへ「御鷹之鶴」拝領に関する連絡と御礼を行なうなどといったことも確認できる。
- (27) 根岸茂夫「秋田藩における座格制の形成」（『近世史論』第一号、一九七九年）、同「元禄期秋田藩の修史事業」（『栃木史学』第五号、一九九一年）など。
- (28) 『国典類抄』一三卷、六九三―六九六頁。
- (29) 享保十四年の宿継拝領の鶴の御披においても、「岡本又太郎・真壁甚太夫座論旧冬中立置候得共、未遂吟味事二候得は御祝儀之砌、異論無之様二内々可申通候」（『国典類抄』一三卷、七〇五頁）というように、座論を確認できる。
- (30) 両家の座列争論の顛末については、『国典類抄』一一卷、七三一―七四九頁参照。
- (31) 註（一）拙稿参照。
- (32) 鶴殺し事件については、鈴木亀雄「謎の鶴殺し事件」（一九八六年、崋書房）、芦原修二口訳「毛吹草―延宝の鶴殺し事件―」（一九七七年、崋書房）などがある。
- (33) 児玉幸多校訂『阿部家史料集―公餘録（上）―』一八頁、一九七五年、吉川弘文館。
- (34) 塚本学前掲著書参照。
- (35) 戦国期の成果としては、盛本昌広「戦国期の鷹献上の構造と贈答儀礼」（『歴史学研究』六六二号、一九九四年）が注目される。また、同氏の「中世の養生」（『列島の文化史』八号、一九九二年）は当時の食物に対する人々の認識のあり方なども示され興味深い。
- (36) 前掲保立論文。

